

巻頭言 就任の御挨拶

一般・消化器外科学教室 教授
李 相雄



大阪医科薬科大学一般・消化器外科学教室は、昭和51年4月に旧第一、二外科の再編成により開講し、初代教授には旧第二外科の板谷博之教授（昭和22年京都大学卒 昭和42年6月より第二外科教授）が就任されました。その後、昭和53年8月1日に岡島邦雄教授（昭和28年岡山大学卒 前岡山大学第一外科助教授）が就任され、取り扱う疾患は、頸部（甲状腺）、乳腺、消化管、肝胆膵、血管と広範囲にわたり、とくに胃癌切除数は2,000例を超え、切除例の詳細な検討に基づくType oriented surgeryを確立されました。続いて、谷川允彦教授（昭和45年京都大学卒 前福井医科大学第二外科助教授）が平成9年4月16日に就任され、臨床では消化器外科領域における低侵襲手術の開発と普及に貢献されました。また、国際交流にも注力され、フランス国家功労賞シュバリエを受賞されました。平成23年6月には、内山和久教授（昭和58年大阪医科大学卒 前和歌山県立医科大学第2外科准教授）が着任され、専門の肝胆膵領域における高難度手術の定型化とともに低侵襲化を推進されました。さらに2015年に小児外科診療をスタートさせ、新生児から超高齢期まですべての年代に対応できる診療体制を確立されました。そして現在では、年間1,500例超の手術症例数を誇る臨床診療科に発展し、三島二次医療圏の高難度消化器手術と乳癌治療、そして小児外科治療の中心的役割を担うに至っています。

私は平成元年に大阪医科大学に入学し、学生時代はラグビー部に所属して生涯の仲間を得ました。平成7年に卒業後、当時の岡島外科に入局し、外科医として根幹となるべき基本的価値観を叩き込まれました。北摂総合病院での後期研修を終えて平成12年に帰学し、当時では先進的治療であった腹腔鏡下大腸癌手術に初めて出会い、その後の外科医人生が決定づけられました。平成25年度からは上部消化管グループの指導医として、食道疾患350例、胃疾患1,360例の外科診療に携わり、外科手術の低侵襲化と安全な普及に取り組んでまいりました。



これまでに多くの諸先輩や同僚、そして教職員の皆様に支えて頂き、令和4年4月1日付で当教室の第五代教授を拝命致しました。本稿をお借りしまして、すべての方々に心より御礼申し上げます。

大阪医科薬科大学病院における当教室の役割として、質の高い高難度消化器手術を継続して提供するとともに、横断的協力体制による超高齢社会に即した低侵襲集学的治療の開発を進めます。そして、手術後のケアを包括した地域健康管理システムへの積極的な関与による「たかつきモデル」発展へ貢献したいと考えます。さらに、教室では、「患者さん、教職員とその家族、そして地域社会から、信頼され称賛される大阪医科薬科大学」をOUR VISIONとしました。

外科医を表するのに、「鬼手仏心」という言葉があります。広辞苑には、「外科手術は体を切り開き鬼のように残酷に見えるが、患者を救いたい仏のような慈悲心に基づいているということ」とあります。確かに、外科手術は患者さんにとって残酷な医療行為ですが、近年の外科手術の低侵襲化には目を見張るものがあります。ただし、今後どれだけ医療が発展し低侵襲化が進んだとしても、「仏心」は外科医に備わっておくべきもっとも大切な資質であると私は考えます。技量と知識だけでなく心を兼ね備えた外科医を育成すること、そして、次代のリーダーを残すことが私の最大の使命だと考えています。若い医局員と力を合わせて、外科学の発展に僅かでも貢献でき、そして地域の信頼に応えられる外科医療を提供できるよう鋭意努力する所存でございます。皆様におかれましては、より一層のご指導ご鞭撻を賜りますよう心よりお願い申し上げます。

